

Vol.33
2009 冬の号



Asia-Pacific Tourism Exchange Center (APTEC)

アジア太平洋観光交流センター (APTEC) ニュースレター

TOURISM 21

本保芳明・観光庁長官あいさつ ... p2

UNWTO青少年ツーリズム交流国際セミナー ... p4

京都金剛能楽堂で「観光と環境に関する国際シンポジウム」開催... p6

「第14回観光に関する研究論文」表彰式を開催 ... p8

日本の歴史的文化財等の魅力発信のための外客誘致促進事業をフランス・パリで開催... p11

新潟空港の来訪者による経済効果は年間199億円... p12

UNWTOニュース ... p14

賛助会員名簿 ... p15

国際観光交流を世界経済回復の けん引役に

観光庁長官

本 保 芳 明



昨年10月1日付観光庁長官に就任しました本保芳明です。関係者の皆様方には日頃より観光庁に対しご理解及びご協力を賜っておりますことに深く御礼申し上げます。

国際観光交流の重要性

「観光は平和へのパスポート」という言葉がありますが、国際観光交流の拡大は相互理解を深め、信頼関係を構築する礎となることから世界の協調的発展に大きく貢献するものです。また、観光は様々な産業にリンクしており、交流人口が拡大すれば観光分野だけにとどまらず他分野への波及効果もあり地域全体の経済活性化にも繋がるものです。

しかしながら、世界的な金融不安の煽りを受け、昨年9月以降世界の景気が急落したことに伴い、観光を取り巻く環境は大きく変化しました。UNWTO統計によりますと、アジア太平洋地域の国際旅行者到着数

は、2007年は対前年比10.5%増であったものが2008年（1月～10月）推計では、対前年比約3%増と増加の伸び率が急激に鈍化しております。観光振興は経済回復に対して貢献性の高い分野としてより一層期待されている中、国際観光交流人口の減少は、観光の健全な発展を妨げるだけではなく、観光分野において景気回復に向けたインセンティブを与えられず、結果的に経済状況の早期回復に向けた貢献を行えないという好ましくない状況を生じさせております。

そのような状況にあっても、アジア太平洋地域は、他の地域に比べ高い経済成長率を示しており、国際経済における重要性が一層高まるものと予測されることです。また、アジア太平洋地域は質量ともに優れた観光資源を有しており、観光客拡大へのポテンシャルが高いものと想像しています。したがって、アジア太

平洋地域における観光交流が早期に回復することにより、国際観光交流の拡大にひいては世界経済の回復に向けた牽引役となることが期待されることです。

このようなアジア太平洋地域を核とした国際観光の再活性化に向けUNWTO及びアジア太平洋センターが果たす役割に期待しているところです。

観光庁の発足

観光立国の実現は、21世紀の国づくりの柱となるものとして、国を挙げて観光立国の実現に向けた施策を総合的かつ計画的に推進するための中心となる「観光庁」が昨年10月1日に発足し、その推進体制の大幅な強化が図られました。これは、観光立国の実現に向けた国として大きな決意を示したものと認識しております。

こうした認識の下で観光庁では、



神谷次長と看板を掲出する長官

観光立国推進基本計画に掲げられた目標を達成することを至上命題として、ビジット・ジャパン・キャンペーンの展開による訪日外国人旅行者の増大や国際会議の開催・誘致の促進とともに、国際競争力の高い魅力ある観光地づくり、観光産業の強化等に積極的に取り組んでいるところです。その上で先日、観光立国推進戦略会議においてとりまとめて頂

いた、2020年に年間2000万人の訪日外国人旅行者を目指した中長期的戦略に基づき、新たな課題にも果敢に挑戦して参りたいと考えております。

観光庁では発足に当たり、新組織にふさわしい、新しい意識と組織文化を創造していくとの決意から、「開かれた観光庁」をキャッチフレーズとして、観光庁の理念と職員ひとり

ひとりの行動憲章を定めた「観光庁ビジョン」を策定致しました。また、観光立国の実現に向けた取組を着実かつ効果的に進めるため、取り組むべき施策の内容やスケジュールを「観光庁アクションプラン」として策定しました。さらに、行政運営上の参考とするため、「観光庁アドバイザリー・ボード」を本年1月に開催し、外部の有識者として6名の方々にご参加頂きました。今後も観光庁の運営方針や施策の立案・実施状況等について定期的にご意見を頂くこととしています。

観光庁はこのように、外部の意見を取り入れながら、PDCAサイクルを徹底しつつ、より分かりやすい形で仕事のプロセスや成果を示して参りたいと思います。

観光庁としては今後も関係者との連携を強化しながら、新しい課題にも的確に対応し、スピーディーかつ効率的な観光行政の展開を図ることで、観光立国の実現を目指し、国を挙げた取組を進めてまいりまいる所存ですので、皆様方の一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



金子国土交通大臣との除幕式

UNWTO青少年ツーリズム交流国際セミナー

2008年11月10日(月)に世界観光機関(UNWTO)、日本国観光庁(JTA)が主催するUNWTO青少年ツーリズム交流国際セミナーが大阪国際会議場で催され、170名が参加した。アジア太平洋観光交流センター(APTEC)は、このセミナーの企画・運営を全面的に行った。

近年、日本と中国、韓国など近隣諸国のツーリズム交流は双方の国における努力で、著しく伸長しているが、今回のセミナーは、青少年という世代に絞って、彼らのツーリズム交流の実態がどうなっているのか、また彼らが、どのような交流形態を望んでいるのかについて、分析、考察しようとしたものである。

特に、ツーリズムの発展が著しいアジア・太平洋地区の動向を中心に、世界のユースツーリズム交流のあるべき姿を徹底的に議論することとした。

講演者は国連アジア太平洋経済

社会委員会(UNESCAP)の協力を得て招聘された香港理工大学 ホテル&観光業管理学院のケイ・チョン筆頭教授 兼 学院長、アジア太平洋観光学会(APTA)会長 兼 韓国ドンア大学のイム・サンテク教授、タイ政府観光庁(TAT)政策・計画局 市場データベースグループのスワット・ジュタコン部長、そしてUNESCAP ツーリズム・ユニットチーフの山川隆司氏というそうそうたるメンバーを海外から招聘し、日本国内からはUNWTOと提携した立命館アジア太平洋大学(APU)のマルコム・クーパー副学長と同大学の留学生4名、関西から阪南大学の前田弘教授と同大学の学生4名が参加した。また、関西の受け入れの立場から大阪観光コンベンション協会学校交流コーディネーターの湯浅勝史氏からも講演を賜った。更に講演と、パネルディスカッションの司会をツーリズム・マーケティング



UNESCAP山川氏



ツーリズム・マーケティング研究所高松氏

グ研究所の高松正人 取締役マーケティング事業部長にお願いし、ユースツーリズムについて議論を行うために万全の体制を敷いた。

各講演者の貴重な講演に加え、パネルディスカッションでは様々な思い、アイデアが学生諸君自身からも出され、ユースツーリズム交流促進のために大いなる方向性を関係者に与えた。

なお、翌日は阪南大学が関わっているコミュニティ・ツーリズムの実例として、大阪府堺市を中心とした視察を講演者、APUおよび阪南大学の



会場風景



パネルディスカッション 阪南大学学生



講演者及び出席者との記念撮影



APU留学生

学生の参加を得て実施し、この場でも、様々な貴重な意見が交換された。

当財団は今後とも、観光産業界も最も注目している分野の一つであるユースツーリズム振興について、様々な機会を取り上げていく予定である。



スタディーツアー（堺市内）

日本 インド観光交流促進シンポジウム延期のお知らせ（お詫び）

2008年夏秋合併号（Vol.32）でご案内した 2009年1月13日開催の予定であった日本 インド観光交流促進シンポジウムは、諸般の事情で延期となりました。改めてインド側と協議の上、2009年度中に実施できるよう努力してまいります。関係の皆様には大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

京都金剛能楽堂で 「観光と環境に関する国際シンポジウム」開催

本年2月3日、観光庁及び世界観光機関（UNWTO）が主催し、財団法人アジア太平洋観光交流センター（APTEC）が企画運営を行った「観光と環境に関する国際シンポジウム」が京都市上京区の金剛能楽堂において開催された。

このシンポジウムは、2010年に訪日外国人旅行者数を1000万人とすべく観光庁が展開しているビジット・ジャパン・キャンペーン（VJC）の一環として実施されたもので、特に欧米人を中心に訪日外国人旅客が増加しており、さらに、1997年に地球温暖化防止会議（COP3）が開催され、環境問題についても先進的な取組みが続けられている京都で開催されたものである。

（1）ファミトリップ

当日午前中、外国人メディアを対象に京町家など京都市内にあるエコポイントとして有名な場所を巡るツアーが行われた。

参加者は東本願寺の渉成園で冬の

日本庭園の美を堪能するとともに、京町家では坪庭など機能的で環境にも優しい京都の伝統建築とそこでの生活の知恵を体験した。

（2）シンポジウム

午後、日本の伝統芸能である「能」の舞台会場として有名な金剛能楽堂でシンポジウムが開催され、環境問題への意識の高まりと環境に配慮した観光振興の取組みが各地で進められていることもあり、観光や環境問題に携わる関係者をはじめ行政、一般の方々等約220名が参加した。

シンポジウムでは、まず、主催者である観光庁を代表して各務近畿運輸局長から「地球環境問題がクローズアップされている中、観光振興に当たっても環境への配慮が求められている。1997年にCOP3が開催され、エコ・ツーリズム等観光面においても先進的な取組みが盛んな京都が



ファミトリップの様子

ら、新しい観光振興と環境のあり方を発信していきたい」と挨拶があった。続いて世界観光機関（UNWTO）アジア太平洋センターの本田代表から「UNWTOも"持続可能な観光開発（ST-EP）"の推進を行っており、観光並びに環境の面で積極的な取組みが行われている京都において開催されるこのシンポジウムの意義は大きい」との挨拶が行われた。

その後、京町家の保存をはじめ京都の観光と環境問題への取組みに精通した京都府立大学の宗田好史准教授から「最近の京都への観光客の流入状況や個人の観光行動様式の変化などの現状分析から、観光と環境を巡る今後の京都の観光振興を考えるための課題、方向性」について問題提起が行われた。続いてUNWTO本部から招聘されたガボール・ヴェレクチ氏が「"持続可能な観光（Sustainable Tourism）"に関するUNWTOの考え方や活動の状況、並びに世界各地における環境に配慮した観光開発の取組みの先進事例等の現況」を内容とする講演が、さらに、ローマ大学のモンタナーリ教授が「ヨーロッパにおける観光と環境を巡る議論や経過、各国におけ



会場風景



各務近畿運輸局長



コーディネーター宗田氏



UNWTOガボール氏(左)と
ローマ大学モンタナリー氏(右)

る持続可能な開発への動き、特にイタリアにおける生産現場から食卓までの食物の安全性の追求と消費者と生産現場との交流というスローフード、スローツーリズム等の現状」を内容とする講演を行った。

続いて、開催地である京都からの報告として、まずNPO法人の理事でエコ・ツーリズムなどに取り組んでいる下村委津子氏が、京都におけるエコ・ツーリズムの現状についてエコ修学旅行やグリーン購入の取組み状況を例に挙げた報告を行い、次に京都府政策企画部副課長の村尾俊道氏が、桜の春、紅葉の秋に集中する京都の観光客の流入による交通渋滞問題などの現状とパーク&ライド方式を中心とした対策状況を報告した。特に、自動車に過度に頼る昨今の状態から自転車や鉄道等公共交通機関の利用に転換させることを目的として地域で取組むモビリティ・マネジメントの取組みの拡大を訴えた。最後に、料理店「草喰」なかひがしの主人である中東久雄氏が、食材を重視する京料理からみる環境への思いについて、自然によって生まれた食物を自然の恵みを自覚して食べることを大事にするという心構えを中心に、料理人の立場から報告した。

この後、宗田准教授をコーディネーターに、講演者のヴェレクチ氏等5名をパネリストとして、「持続可能な観光文化都市・京都をめざして」をテーマにパネルディスカッションが行われた。



パネルディスカッションの様子
(右端より中東氏、村尾氏、下村氏)

冒頭、海外からの二人の講師が、世界から見た伝統文化都市としての京都の印象や観光と環境のあり方について意見を述べるとともに、世界的な持続可能な観光への取組みの流れとともに、伝統文化に溢れる京都の特性を調和させた持続可能な開発への取組みを推進させることが重要であると提言した。これに対し、地元京都のパネリストからは、京都でも近年増加している外国人観光客の環境意識は変化しつつあり、受入れ側である京都市民も環境に対する意識変革が進んでいること、特に、京都独自の伝統的な視点から環境、エコに対する関心を引き出すという体験型の観光形態が広がっていること、伝統的な京都料理という「食」を柱に京都観光を考え直す観光形態が広がってきている等が報告された。

また、午前中に実施されたファム

トリップの参加者からも発言があり、京都の自然、環境を重視する考え方への賛同がなされた一方、地産地消の考え方を重視する反面、食材の高騰により価格が上昇しており、京都に住む外国人にとっては生活が苦しくなっているとの指摘もなされた。

最後に、宗田氏が「京都では食をテーマに地球環境とライフスタイルを考え直す観光形態が広がってきており、そこから、食だけでなく衣・住の観点からもライフスタイルを見直すことができる。京都の社寺で今も行われているLohasな伝統の暮らしに多くの人々が引き付けられ、そこから始められる環境を意識した行動が多いことを確認し、持続可能な観光につなげ、京都を日本のエコツーリズムの発信拠点としたい」と締めくくった。

「第14回観光に関する研究論文」表彰式を開催

当財団は、昨年12月16日にホテルグランヴィア大阪で「第14回観光に関する研究論文」の表彰式を行った。この観光論文募集事業は、観光振興を図るとともに観光学の発展に寄与すべく、観光分野の実務家、学生、研究者などを対象に、当財団が設立された平成7年度から毎年実施しており、今回で14回目となる。

今回の応募件数は40件と過去最多で、20歳代から70歳代と幅広い年齢層からの応募があり、また、学生・大学院生・留学生から社会人まで幅広い層に及んでいた。テーマについても国の「観光立国」に向けた取組みを反映して、インバウンドツーリズム、エコツーリズムに関するものが目立ち、さらに観光振興のための人材育成、バリアフリー旅行、観光財源確保のための法定外目的税、さらには途上国の観光開発の研究など幅広い分野に及んでいた。

表彰式では当財団の本田勇一郎理事長の挨拶に続いて、審査委員長の白幡洋三郎 国際日本文化研究センター教授から次のとおり講評があった。

本年度の応募論文は過去最多であり、その分審査は困難を極めた。全体の質も例年以上に高く、総じて論文の構成やまとめ方がしっかりしており、論理展開とそれを支える文章が明確であったのが印象的であった。学術的・分析的なものから実務的・提言的なものまで幅広い論文スタイルがみられた。それだけに、各論文に順位をつけるのは難しく、一席、二席と奨励賞、また選外の論文との差も僅差であり、審査の重点が若干でも移動すれば逆転も十分あり得た。

一席に選ばれた野竹論文は、国内旅行先として人気第一位の座を占め続けた北海道観光について、その変遷をたどりながら、特にマストツーリズムに注目し、その実態・内容とこ

れに刺激を与えてきたメディア商品の功罪を検討・吟味して新しい旅行商品の開発可能性を論じようとしたものである。魅力ある北海道観光を持続させるための商品はどのような内容を備えるべきか。マストツーリズムの中で曖昧になった北海道観光の元々の魅力の源泉、すなわち食、温泉、自然を強く再評価すべきなどと主張し、こうした北海道の本質への原点復帰の中に新しいツーリズムの可能性が見出せると主張する。誤記、文法の誤りなど論文作成の基本が未熟との指摘があったが、論理の明確さなどに優れている点と鮮度の高いテーマ設定による具体的提言に力があることが評価された。

二席に選ばれた宮本論文は、観光者に求められる倫理についての考察をめぐらせたものである。従来、観光における倫理といえば、セックスツアーの告発、旅行マナー改善の必要性などテーマが限られていたが、



会場風景



賞状・助成金の授与



白幡委員長の講評



入賞者による論文概要の発表（一席野竹氏）



交流会

本論文は観光倫理を幅広く想定し、その研究の範囲と可能性を検討している。思弁的考察が中心で建前論的印象があり、呈示される問題に具体的事例の指摘が乏しいとの意見も出された。しかし、今後観光振興を図る上で、従来の観光資源開発やツアー企画にとどまらず、観光現場の良好な環境を構築するためにも観光倫理の確立が必要であること、しかも従来個人の責任として対策が講じられなかった問題行動に、これを防ぐための教育という観点を導入して提言していることなど、論文としてのまとまりが評価された。

同じく二席に選ばれた乾論文は、観光は人間にどんな価値をもたらしてくれるのか、と問いかける。多くの観光研究はモノやサービスの消費によって人がいかに「価値」を手

にするかということのみ考察するが、本論文は「消費」だけが観光者の満足をもたらすのではなく、観光行動の中での広い意味の「出会い（社交）」、そして社交の中での総合的な体験としての「経験」によって価値充足がなされると見る。たとえばヒット商品「青春18きっぷ」のポスターには乗車促進の表現はなく、旅の本質を想起させる「経験」「出会い」にかかわる文言が頻出することが本論文では指摘されている。そうした具体例も挙げて、観光学の本源的なテーマである観光が人にもたらす「価値」を真っ向から論じた、抽象に陥らない重厚な意欲論文である。業界への直接提言はないが観光の本質を鋭く指摘して観光研究に大きく寄与する論文として選ばれた。

奨励賞には以下の4本の論文が選ばれた。最近の日本の若者に見られる「海外旅行離れ」がいかなる原因に基づくかという、斬新な課題設定をし、その理由を探って若者がおかれた現代社会の特徴をも指摘した新井論文、奈良観光の問題点と改善への提言を、エッセー風の筆のせて軽妙なノリで描き、学術論文よりはるかに効果的な説得力ある読み物に仕上げた鉄田論文、忘れられ、利用されなくなっていた観光資源への愛着をバネに、仲間と行った観光活性化運動のいきさつとその成果を元気あふれる報告にまとめた金川論文、観光に関わる仕事に従事する者は異文化の媒介者であるとの観点から、観光における職業英語教育の重要性を説き、コミュニケーション上の「心がけ」を提言した斉藤論文。

以上それぞれ読み応えのある出色の論文が揃った。

また残念ながら選にもれたが、日本ではほとんど知られていない近代中国における避暑のありかたとその背景にある歴史事情を論じたもの、団体旅行の歴史とその功績並びに問題点の検証を通じて将来を論じたもの、観光振興に向けた財源確保のための法定外税の意義と観光への障害の有無などを具体例に即して検証したもの、日本の中華街を本国のまやかしか文化や模倣文化と見るのではなく、現に台湾・中国の観光客も訪れる独自の価値を持った移民文化と見る斬新な視点で分析したもの、佐渡島に広く伝承されている芸能鬼太鼓が持つ観光上の重み、経済的意味、経済外的意味の微妙な相関を探ったもの、いずれも審査員から講評の中でとくに一言触れる必要ありと指摘された論文である。これ以外にも、あと少々で入賞可能な力作・傑作が少なくなかった。

来年度以降もまた多くの方々の応募を待ちたい。



受賞者と審査委員

続いて、当財団の本田理事長から入賞者（一席1件、二席2件、奨励賞4件）に賞状と研究助成金を授与した。（「第14回観光に関する研究論文入選論文」参照）

その後、一席、二席及び奨励賞の入選者がそれぞれ論文の概要を発表した。

引き続き行なわれた交流会では、受賞者、審査委員その他の出席者とが意見交換を行い、受賞者の皆さんからは論文作成過程における苦労話や裏話、今後の抱負・取組み等が披露された。

第14回観光に関する研究論文 審査員名簿

平成20年11月12日現在

	氏名	役職
審査委員長	白幡 洋三郎	国際日本文化研究センター教授
審査委員	橋爪 紳也	大阪府立大学教授 (観光産業戦略研究所長)
同	橋本 俊哉	立教大学教授(観光学部)
同	新納 克廣	奈良県立大学准教授 (地域創造学部)
同	舟橋 哲	立正大学准教授(法学部)
同	大滝 昌平	観光庁参事官(国際会議担当)
同	新井 俊一	社団法人 海外鉄道技術協力協会顧問
同	本田 勇一郎	財団法人 アジア太平洋観光交流センター 理事長

(順不同・敬称略)

「第14回観光に関する研究論文」入選論文

一席	北海道におけるマストゥリズムの変遷と新しい北海道ツーリズム 野竹鉄蔵(ノタケ テツゾウ)名鉄観光サービス(株)関西営業本部 営業管理部 課長
二席	観光振興における観光倫理教育の必要性-東南アジア地域の観光を念頭に- 宮本佳範(ミヤモト ヨシノリ)名古屋市立大学人文社会学部 研究員
二席	観光行動プロセスにおける「社交」と「経験」 乾 弘幸(イヌイ ヒロユキ)九州産業大学商学部観光産業学科教授 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻 博士後期課程2年
奨励賞	日本の若者における「海外旅行離れ」の背景の分析と対応に関する一考察 新井秀之(アライ ヒデユキ)東洋大学大学院博士後期課程 国際地域学研究科 株式会社パラダイスインターナショナル
奨励賞	「観光立県・奈良」への提言 鉄田憲男(テツダ ノリオ)株式会社南都銀行 総合企画部 部次長
奨励賞	ある観光資源活性化の取り組み-伏見桃山城を舞台に和と輪で繋がる- 金川由紀(カナガワ ユキ)平安女学院大学国際観光学部 講師
奨励賞	観光ビジネスにおける職業英語教育-異文化メディアエーターの視点から- 斉藤いづみ(サイトウ イヅミ) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 博士前期課程修了

日本の歴史的文化財等の魅力発信のための 外客誘致促進事業をフランス・パリで開催

～ 平城遷都1300年記念海外情報発信セミナー～

本年2月17日、観光庁の主催、財団法人アジア太平洋観光交流センター（APTEC）の企画運営の下、ビジット・ジャパン・キャンペーン事業「日本の歴史的文化財等の魅力発信のための外客誘致促進事業～平城遷都1300年記念海外情報発信セミナー」がフランス・パリ市内で開催された。2010年が平城遷都1300年に当たることを記念し、数多くの世界遺産が散在する奈良を中心とする関西へ、日本文化に関心の高いヨーロッパの中高齢者を中心とした人々を対象に訪日客の拡大を図ろうと実施されたものである。

セミナーは、2月17日午後、日本文化をフランス人に紹介する活動を行っているパリ日本文化会館大ホールで開催されたが、フランス人の日本の伝統文化への高い関心もあって、会場にはフランス人約160名を含む300名以上が詰めかけ超満員となり、あきらめて帰る人も出るほどの盛況ぶりであった。冒頭、スクリーンに映し出された朱雀門をバックに、観光庁の大滝昌平国際会議担当参事官が、「本セミナーはフランス人を対象にしているが、ここフランスから必ずヨーロッパ全体に日本文化が広まるものと期待しており、多

くのヨーロッパ人が、遷都1300年を迎える奈良、関西を訪問していただけることと確信している」との観光庁本保長官の挨拶を代読した。

続いて、奈良県の荒井正吾知事が、「近畿圏は世界遺産をはじめとする世界に誇る歴史遺産を数多く有している。特に奈良県には、ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで三ツ星評価を得た17個所のうち2箇所がある。欧州を中心とした人々に訪日していただくことにより、日仏の更なる交流に繋がると思っている。平城遷都1300年を記念して様々な事業を展開しており、皆様方が訪問してくれることを期待している」と地元を代表してフランス語で挨拶を行った。この後、平城遷都1300年記念事業協会から、秋山喜久会長が「平城遷都1300年を機に、日本の歴史・文化が連続と続いたことを祝い感謝するとともに、過去・現在・未来の日本を考え、本事業を契機とした観光交流の一層の拡大を通じて関西圏の振興を図りたい。2010年奈良でお会いしましょう」との挨拶を行った後、関西の各府県にある世界遺産の紹介とともに、平城遷都1300年祭の概要を内容としたプレゼンテーションが行われた。

続いて、奈良県の法相宗薬師寺の安田映胤管主が「世界をまほろばに」と題する講演を行った。安田氏は、「まほろば」とは美しい所、秀でた所という意味であるが、「まほろば」という国を築くためには、感謝の心、慈愛の心、尊敬の心、懺悔の心、許しの心という「まほろば」の心が大事



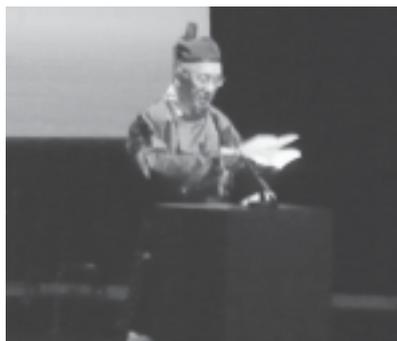
南都声明の公演

である。今なお中近東で戦争による犠牲者が続出しているが、一人ひとりが「まほろば」の心、美しい心をもって、家庭から、地域から、力の及ぶところから「まほろば」をつくる努力をしてほしい、と聴衆に訴えた。

その後、安田管主をはじめとする薬師寺僧侶により、伝統的な仏教儀式である「南都声明」の公演が行われた。声明は、6～7世紀から伝わる仏教音楽で、仏への供養や人々の幸福祈願などの目的で僧侶たちが仏教行事で唱えてきた。最初の一節を唱えては礼拝を繰り返し、残る僧侶が輪唱のように追いかける祈りの声が鐘の音などとともに響き渡ると、会場は荘厳な世界に包まれた。

セミナー終了後、会場を移し、約100名が参加し、交流会が行われた。交流会では、薬師寺の僧侶により写経の実演が行われ、ここでも日本の伝統、心がフランス人に感銘を与えていた。

また、当日の会場入り口周辺及び23日（月）～28日（土）は会場を同じくパリ市内にあるベルタン・ポワレに移し、関西の遺産や奈良の伝統文化財等のパネル等の展示会が開催され、多くのフランス人が訪れ、興味深げに見入っていた。



荒井奈良県知事の講演

新潟空港の来訪者による経済効果は年間199億円

空港利用の観光旅客等の実態調査報告書のまとめ

当財団では、このほど、平成20年度の新潟空港を利用する観光旅客等の実態調査報告書を取りまとめた。調査に当たっては、「航空機を利用する観光旅客等の実態調査審査委員会」（委員長は柳原拓治北陸信越運輸局企画観光部長）を設け、調査項目等の検討を行った。

この調査は、新潟市周辺地域に観光やビジネス等で訪問し、目的を終えて新潟空港（国内線及び国際線）から帰る搭乗客（自宅へ帰る日本人及び自国へ帰る外国人含む）を対象に、旅行目的・旅行形態・活動内容・滞在中の費用内訳等の項目について行った。

調査実施日は、昨年10月3日（金）4日（土）及び5日（日）の3日間で、新潟空港ターミナル搭乗待合室内及び出発ロビーにおいて、面接調査方法で実施した。

回収アンケートの総数は、712枚（日本人429枚・外国人283枚）であった。

【調査結果の概要】

1. 新潟空港を利用する来訪者が地元経済に及ぼす影響は年間199億円

新潟空港国内線の年間利用者は約101万人で、その内、調査の対象で

ある日本人の新潟県周辺への訪問者の割合は51.0%と推定される。一方、国際線では年間利用者約23万人の内、外国人の割合は39.1%である。また、国内線において、外国人訪問者と思われる割合が、0.0%であった。

これら訪問者数と本調査で得た結果に基づく試算により、新潟空港を利用する来訪者が及ぼす年間の経済効果は、日本人で約145億円、外国人で約54億円、全体では約199億円と推定される。このうち、新潟県に及ぼす経済効果は、日本人で約102億円、外国人で約24億円、合計約126億円、新潟市に及ぼす効果は、日本人で約76億円、外国人で約20億円、合計約96億円と推定できる。

また、宿泊に関する経済効果は、全体では約97億円（新潟県では約46億円、新潟市では約33億円）、食費については全体で約58億円（新潟県では約37億円、新潟市では約28億円）、ショッピングでは全体で約24億円（新潟県では約15億円、新潟市では約11億円）と推定される。

2. 高い新潟市の訪問率

宿泊地のアンケート調査（複数回答）で日本人では60.4%の人が、「新潟市内」と答えた。また「佐渡地方」に泊まったと答えた人は9.8%

であった。

一方外国人では53.7%の人が「新潟市」に宿泊したと答えた。「東京都」が36.0%であった。

外国人の滞在中の活動経験内容で最も高かったのは「市内見物」53.4%が経験している。二番目に高かったのは「温泉」で38.9%の人が温泉入浴を経験している。

3. 相対的に高い業務目的

新潟空港を利用する訪問者の58.5%が業務（ビジネス）と答えている。男性では69.8%が業務と、圧倒的にビジネス客が多い。上越新幹線の影響で東京便はないが、最も便数の多い大阪（伊丹）便はビジネス路線と考えられる。

4. 多様性に富んだ国際線

ソウル線、グアム線、ハルビン線、上海線、ウラジオストック線、ハバロフスク線と二種空港では変化に富んだ国際路線を持っている。成田、関空、中部にもない極東ロシア便を持っている点が強みである。中国、ロシアからの訪問客の平均滞在総費用は130,000円と高い。

外国人全体でも、過去11回の調査と比較しても、仙台空港に次いで二番目に高かった。



【主要なアンケート結果】

1. 旅行目的 (上位2項目づつ)

日本人男性	業務	69.8%
	観光	7.7%
日本人女性	観光	29.9%
	業務	21.6%
外国人男性	観光	44.9%
	業務	29.1%
外国人女性	観光	49.3%
	業務	15.2%

2. 日本人居住地 (上位3項目)

関西	45.7%
北海道	13.3%
中京・東海	12.1%

3. 外国人居住地 (上位3項目)

韓国	39.5%
ロシア	29.1%
中国	24.5%

4. 旅行予約形態 (上位2項目)

日本人	チケットレスで購入	25.4%
	その他	23.1%
外国人	旅行会社で購入	40.6%
	団体旅行	19.1%

5. 新潟空港へのアクセス (上位3項目)

日本人	空港バス	34.7%
	タクシー	22.1%
	自家用車送迎	18.4%
外国人	団体バス	35.7%
	空港バス	22.3%
	自家用車送迎	16.3%

6. 日本人の到着空港等 (上位2項目)

新潟空港	74.6%
その他	9.8%

7. 外国人の到着空港等 (上位2項目)

新潟空港	64.7%
成田・関空	11.7%

8. 宿泊地別回答の割合 (上位3項目)

日本人	新潟市内	60.4%
	佐渡地方	9.8%
	中越地方	9.1%
外国人	新潟市内	53.7%
	東京都	36.0%
	新潟市周辺	14.1%

9. 「ビジット・ジャパン・キャンペーン」認知率

日本人	23.8%
外国人	30.7%

10. 滞在中の活動経験内容 (複数回答・上位3項目)

日本人	仕事	55.9%
	市内見学	10.5%
	史跡・名所	10.5%
外国人	市内見学	53.4%
	温泉	38.9%
	ショッピング	32.9%

11. 主要観光地の訪問率 (複数回答・上位3項目)

日本人	新潟市	39.6%
	佐渡	8.6%
	燕・三条地区地場産業施設	4.2%
外国人	新潟市	35.7%
	月岡温泉	11.0%
	佐渡	9.2%

12. 滞在中の平均総費用 (往復の交通費は含まない)

日本人	56,329円 (一日当たり 15,224円)
外国人	121,038円 (一日当たり 18,339円)

13. 再訪問の希望

日本人	是非また来たい	62.0%
	機会があれば来たい	25.6%
	どちらともいえない	7.2%
外国人	是非また来たい	48.1%
	機会があれば来たい	33.6%
	無回答	7.1%

以上

報告書全文は (財) アジア太平洋観光交流センターの
ホームページに掲載

<http://www.aptec.or.jp/>

UNWTOニュース

世界経済悪化の影響を受ける国際観光

2008年の世界観光

2008年は世情不安と大きな変化の年として歴史に刻まれる年となった。世界観光機関（UNWTO）による翌年予測を掲載した2008年1月版「UNWTO世界観光指標」刊行後の1年間に、信用逼迫、広がる金融危機、日用品・原油価格の高騰、為替レートの大変動等の要因からくる、極度に不安定で思わしくない世界経済の影響で、世界中の国際観光客到着数の伸びが大きく鈍化した。必然的にビジネス界も消費者マインドもいずれもこの波に飲み込まれ、世界的な景気後退の一因となっている。

国際観光客到着数は2008年前半5%の増加を見せたが、後半にはマイナスの伸び率となった（1%減）。最終的には通年で2%増、4年連続して高成長を見せた2007年の7%増から落ち込む見込みである。しかも、この下降傾向は2009年に好転する気配は全くない。2009年は、到着数はよくとも横ばい、最悪の場合は前年比数パーセント減となる見込みである。

2009年世界観光の予測

現在の経済不況は2009年にも、またおそらくはそれ以降も続くと予想されるため、UNWTOの2009年の予測はいっそう控え目なものとならざるを得ない。国際観光客到着数の伸びは、横ばいから2%減の範囲になると予想される。しかし、依然として不確実性の度合いは高く、多くのことが経済状況の進展にかかってくるであろう。もし、経済が悪化すれば、3%減まで下方修正しなければならぬかもしれず、また、予想

より早く経済回復すれば、2009年の国際観光は1%増となることもある。

多くの送客市場が景気後退に陥っており、あるいは陥りつつあるため、米州と並んでヨーロッパが全体的な観光実績では、最も影響を受けるであろう。ヨーロッパは3%減～横ばいのマイナス成長で、落ち込むことが予想される。米州は1%減～2%増の伸びが予測される。アジア太平

洋地域の実績は0～3%増のプラスになると予想される。しかしながら、同地域の近年の実績に比べると、伸びははるかに落ち込むであろう。同じことがアフリカおよび中東にも言える。国際観光客到着数はアフリカで1～4%増、中東で2～6%増になると予想されるが、両地域とも基礎データが比較的限られ、且つあまり安定していないため、誤差が大きい。

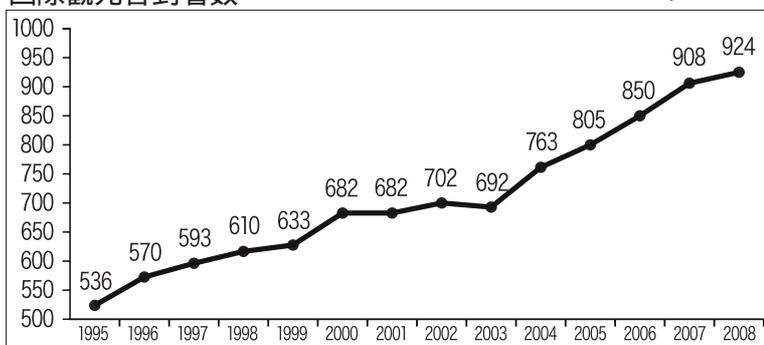
地域別国際観光客到着数の2008年実質成長率と2009年予測成長率

	2008年実質	2009年予測
世界	1.8%	-2%～0%
ヨーロッパ	0.1%	-3%～0%
アジア・太平洋	1.6%	0%～3%
米州	3.6%	-1%～2%
アフリカ	4.6%	1%～4%
中東	11.3%	2%～6%

出典：世界観光機関（UNWTO）

世界：インバウンド・ツーリズム 国際観光客到着数

(100万人)



出典：世界観光機関（UNWTO）

さらに詳しい情報は、当センター発行の「2007年国際観光概観」（2007年の世界規模の国際観光に関する統計と2008年速報値・2009年予測）に掲載しております。

また、29カ国・地域からのアウトバウンド旅行者数を掲載した「世界観光統計資料集（2003～2007年）」もあわせて発行しております。

上記資料の入手をご希望の方は、当センターまでお問い合わせくださいませ。

財団法人アジア太平洋観光交流センター

TEL：072-460-1200 FAX：072-460-1204 Email：info@aptec.or.jp

APTEC通信

平成21年度の当機関誌「TOURISM21」は、試行的にウェブサイトに移行することとし、機関誌として発行することを中断させていただきますが、引き続き、ご愛顧賜りますよう、よろしくお願いたします。

<http://www.aptec.or.jp>

賛助会員名簿

石川県	京阪電気鉄道(株)	トップツアー(株)
(株)インターグループ	(株)合通	(株)トラジャルウエスト観光総合研究所
(株)エアコム	神戸市	中内 カコンベンション振興財団
エアニッポン(株)	(株)神戸ポートピアホテル	名古屋鉄道(株)
大阪ガス(株)	国際観光サービスセンター	奈良県
大阪観光コンベンション協会	国際観光日本レストラン協会	奈良市
大阪国際空港ターミナル(株)	国際観光旅館連盟	成田国際空港(株)
大阪市	堺市	南海電気鉄道(株)
大阪商工会議所	嵯峨野観光鉄道(株)	西日本鉄道(株)
大阪21世紀協会	サービス・ツーリズム産業労働組合連合会	西日本旅客鉄道(株)
大阪府	三洋電機(株)	日本空港ビルデング(株)
大阪府都市開発(株)	(株)ジェイコム	(株)日本航空インターナショナル
(株)カタナヤ	(株)ジェイティービー	日本コンベンションサービス(株)
金沢市	JR西日本ホテルグループ	日本ホテル協会
川西軽印刷(株)	(株)ジェイアール西日本コミュニケーションズ	(株)日本旅行
関西空港交通(株)	滋賀県	日本旅行業協会
関西国際空港(株)	(株)ジャルパック	(株)パデコ
関西電力(株)	住友電気工業(株)	阪急電鉄(株)
北大阪急行電鉄(株)	西武鉄道(株)	阪神電気鉄道(株)
京都市	全国旅行業協会	東日本旅客鉄道(株)
京都府	全日本空輸(株)	兵庫県
近畿日本ツーリスト(株)	東海旅客鉄道(株)	三重県
近畿日本鉄道(株)	東京地下鉄(株)	(株)ロイヤルホテル
京成電鉄(株)	東武鉄道(株)	和歌山県

寄付団体名簿

大阪ターミナルビル(株)	(株)ジェイアール西日本デリーサービスネット	天王寺ターミナルビル(株)
京都駅ビル開発(株)	ジェイアール西日本不動産開発(株)	西日本電気システム(株)
ジェイアール西日本商事(株)	(株)ジェイアール西日本メンテック	
(株)ジェイアール西日本テクノス	大鉄工業(株)	

2009年3月現在 (50音順)

Yokoso! JAPAN

日本政府観光局(JNTO) 海外プロモーション部内 実施本部事務局 <http://www.jnto.go.jp/vjc/>
〒100-0013 東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館ビル10階 電話 03-3216-1902 FAX 03-3216-1846

交通アクセス



電車.....南海空港線、JR関西空港線 りんくうタウン駅下車
車.....大阪市内から 阪神高速湾岸線泉佐野南出口
.....和歌山から 関西空港自動車道泉佐野出口

財団法人アジア太平洋観光交流センター

〒598-0048 大阪府泉佐野市りんくう往来北1番 りんくうゲートタワービル24階
TEL:072-460-1200 / FAX:072-460-1204
<http://www.aptec.or.jp> E-mail:info@aptec.or.jp